

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第192号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成30年6月21日

ツツドリ



2016. 5.14 日高管内新冠町

撮影者 漆崎 修 (札幌市西区)



も く じ

夏鳥初認記録を集めたら、こんなことが分かってきた！

国立研究開発法人 森林研究・整備機構 川路 則友…………… 2

野鳥情報コーナー

鶴川漁港でコケワタガモ…………… 北広島市 先崎 理之…………… 4

伏古公園（札幌市）上空にマダラチュウヒ…………… 札幌市南区 田中かおり…………… 5

表紙の鳥（ツツドリ）…………… 札幌市西区 漆崎 修…………… 5

ロシア極東・鳥紀行（2）…………… 美唄市 藤巻 裕蔵…………… 6

2017年度 北海道野鳥愛護会探鳥会記録（2017.4～2018.3）…………… 9

2018年度（平成30年度）総会報告…………… 12

探鳥会ほうこく…………… 14

探鳥会あんない…………… 16

鳥民だより…………… 16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<http://www.aigokai.org>)で閲覧することができます。

夏鳥初認記録を集めたら、こんなことが分かってきた！

国立研究開発法人 森林研究・整備機構 川路 則友

森林の中では雪解けが進むころから、毎年、ほぼ決まった場所で夏鳥の同じさえずりが突然聞こえるようになると、何ともいえない感動を覚えます（写真1）。こういう経験をされた方々は多いことと思います。そんな季節には、今年は〇〇がかなり早く見られた、とか、△△の渡来は今年ずいぶん遅い、などといった会話がよく聞かれます。しかし、それが何年前の時とだいたい同じだとか、これまで経験したこともないほど早く渡来してきた、といった比較をするためには、長期間の記録蓄積が必要です。とくに同一場所での記録が重要な意味をもちます。ただ、その年初めての渡来記録（初認）を毎年記録する作業は、簡単そうに見えてなかなか難しいものです。いくら決まった場所とはいえ、しばらくぶりに行ったら、もうそこかしこで夏鳥のさえずりがいっぱいだったということになると、実際にはいつが初認日（最初の渡来日）と言えるのがはっきりしません。残念ながら、このようにして蓄積したデータを報告、解析した例はこれまでほとんどありません（川路 1997, 樋口 1999）。

私は、幸い職場に実験林を併設するという恵まれた環境にあったため、春の渡り期にはほぼ毎日のように出勤前に歩き回って観察を行い、十数年間に亘って夏鳥初認記録を集めてきました。また一部は職場の同僚等からも有益な情報を集めることにより、私の記録を補填することができました。場所は、札幌市の南東部、豊平区羊ヶ丘にあります（以下、羊ヶ丘の森とします）。何年間も同じ場所で観察していると、夏鳥のうち、渡来する順番がほぼ決まってくるのがわかります。羊ヶ丘の森では、まずヒバリ、キジバト、ホオジロの3種が3月下旬から4月初旬にかけて最

初に渡ってきます。しかも最初に記録されるのは、毎年ほぼ同じ場所です。ただし、ヒバリだけは、森林内で見



写真1. 渡来直後に樹上でさかんにさえずるヤブサメ

られるわけではなく、お隣に位置する羊ヶ丘展望台近くの牧草地あたりから、さえずりが最初に聞こえてきます。そののち、4月中旬以降にウグイス、アオジ、クロツグミ、ヤブサメと続き、センダイムシクイ、コルリ、キビタキが5月の連休前後、それから連休明けにツツドリ、アオバトで一応一段落、といったところです。この順番は、毎年そう大きくは変わらないようです。

そこで、私が職場にいた期間（1990年～1996年および2009年～2016年）に、毎年春の渡り期に集めた夏鳥の初認記録からどんなことがわかるかを見てみました。この2期間を仮に1990年代と2010年代の記録とします。二つの期間には、平均で約20年間の違いがあります。すなわち、20年間のうちに、夏鳥の初認日がどう変わっているかを見てみたのです。結果の一部はすでに他雑誌に公表しましたが（川路 2018）、その内容も含め、本誌にもご紹介したいと思います。夏鳥としては、数が比較的多く、声や姿で容易に初渡来がわかるものとして10種（キジバト、ホオジロ、アオジ、ウグイス、クロツグミ、ヤブサメ、セン

ダイムシクイ、コルリ、キビタキ、ツツドリ) を選びました。これらは、すべて羊ヶ丘の森で確実に繁殖している種です。

1. 20年間に夏鳥の多くは初認日が徐々に早まっていた!

1990年代と2010年代の平均初認日間でもっとも大きな差が認められたのはウグイスで、20年間で平均6日も渡来が早まっていることがわかりました(表1)。そのほか7種でも同様に渡来が早まっていましたが、センダイムシクイとコルリでは逆に初認日が遅くなっていました(表1)。統計的にみると、アオジ、ウグイス、ツツドリおよびヤブサメの4種で、有意な差が認められました。これらの種の初認日がなぜ早まってきたかという原因については、正直わかりません。一方で、キジバトやホオジロは平均すると初認日がかなり早まったように見えますが、初認日の年変化が激しいことから、必ずしも明確な傾向とは言えませんでした。

表1. 羊ヶ丘の森に渡来する夏鳥の平均初認日 (1990年代と2010年代)

種名	1990年代(平均)	2010年代(平均)	増減
キジバト	4月2日	3月29日	-4日
ホオジロ	4月5日	4月1日	-4日
アオジ	4月18日	4月15日	-3日(*)
ウグイス	4月20日	4月14日	-6日(*)
クロツグミ	4月23日	4月22日	-1日
ヤブサメ	4月24日	4月22日	-2日(*)
センダイムシクイ	4月29日	5月1日	+2日
コルリ	5月1日	5月2日	+1日
キビタキ	5月8日	5月7日	-1日
ツツドリ	5月8日	5月4日	-4日(*)

*は、統計的に有意な差があることを示す

新潟県では、コムクドリの平均産卵開始日が、1978年~1998年の21年間に約2週間も早まったという有名な報告があります(Koike & Higuchi 2002)。毎年、羊ヶ丘の森では研究のために、ヤブサメの自然巣を探しています。見つけた巣の中で、その年にもっとも早く産卵が見られた日を最初卵日として記録します。もちろん、渡来したヤブサメについてすべての巣を見つけられるわけではありませんが、のちに林内でもっとも早く巣立ちヒナが出現した日から逆算すると、我々がその年最初に見つけた巣が、だいたいその年最初に産卵した巣と一致します。そうして得られたヤブサメの最初卵日を1990年代と2010年代で比較してみると、最初卵日の年変化が大きく、平均するとほとんど差は認められませんでした(図1)。これは、羊ヶ丘の森ではヤブサメの渡ってくる時期が徐々に早まっているからといって、繁殖開始も同じようにだんだん早くなってきているとはかぎらないということを意味します。新潟県の例では、巣箱に営巣したコムクドリを観察してわかったことですが、野外での夏鳥の自然巣からこのような記録をとるこ

とは至難の業です。今回はたまたま私自身が熱心に探し回ったヤブサメの自然巣から得られた結果ですが、ほかの夏鳥について同じようなデータをとることはかなり難しいかもしれません。

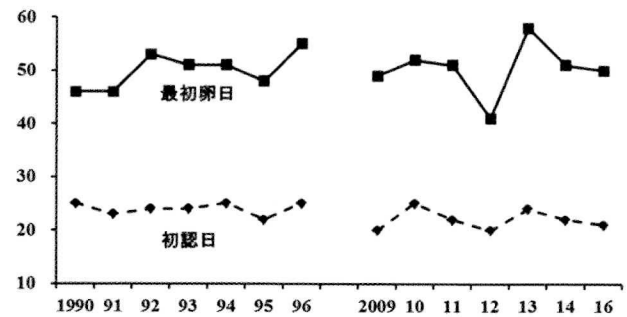


図1. 羊ヶ丘の森におけるヤブサメの初認日、最初卵日の年変化。縦軸の数値は、4月1日を1としたときの換算日

2. 托卵鳥と托卵相手の渡来関係は複雑?

北海道中央部低地林で代表的な托卵鳥といえば、ツツドリです。羊ヶ丘の森でもツツドリと托卵相手との間で壮絶な闘いが毎年繰り広げられています。本州では、ツツドリの主な托卵相手はセンダイムシクイと言われます。羊ヶ丘の森でもセンダイムシクイに托卵する例が圧倒的に多く、ヤブサメ、メジロ、アオジにもわずかながら托卵した例があります(川路 2015, 2016など)。ほかの夏鳥と違って、ツツドリは自分で巣作りをする必要がないので、そんなにあせって渡ってくる必要はないと思われます。ただ、自分の托卵相手(ここではセンダイムシクイとしましょう)がちょうど産卵している時期に卵を産み込まねばなりません。羊ヶ丘の森でのセンダイムシクイは、早いもので5月中旬過ぎには巣作りを開始します。初認日が4月下旬~5月初めくらいですので、渡来後2週間ほどでもう営巣し始めるということです。最初に渡ってくるのはオスと思われますが、メスがその後、どれくらい遅れて渡ってくるのかははっきりしません。これまで羊ヶ丘の森のヤブサメでの経験だと、メスの渡来は、オスより1週間ほど遅れるようです。またセンダイムシクイは早いもので、5月20日前後に最初の卵を産み始め、5月末~6月初旬になると抱卵に入っている巣が増えてきます。ツツドリはこれらを計算して托卵を試みなければなりません。もし渡ってくる時期が遅れてしまい、托卵相手の繁殖が次々進んできて、抱卵期、育雛期に入ってしまうと、もはや卵を産み込むことができなくなります。そこで、ツツドリは渡来時期を托卵相手の毎年の渡り傾向にある程度合わせているのではないかとの推測が成り立ちます。果たしてそうでしょうか?そこで、この20年間の間でのツツドリとセンダイムシクイの初認日の年変化を比べてみました。両者で相関係数を出してみると、かなり低い値が出ました。結果的にはあまり関係がなさそうに見えます(図2)。事実、これまで托卵されたセンダイムシクイの巣をみると、托卵が成功して巨大なヒナを無事に巣立たせた例も多いのですが、托卵時期が遅

れたせいか、センダイムシクイのヒナがじゅうぶん成長してからツツドリの卵がふ化し、すでに大きくなっている義兄弟（センダイムシクイのヒナ）にもみくちやにされ、ついには圧死してしまった例もあります。他人（他鳥？）に我が子の世話を任せるという楽な戦略をとったと思われがちな托卵鳥でも現実はなかなか厳しいのかもしれませんが。

一方、北海道中央部以北では、ツツドリが赤褐色の卵を産むことが知られています（森 2013）。これは本州でウグイスにおもに托卵するホトトギスがここで定着していないことから、ツツドリがウグイスを新たな托卵相手と選び、托卵を成功させるために、ウグイスの卵色に似せた赤褐色に適応させたのではないかと推測されています。羊ヶ丘の森では、ウグイスの密度が低いために、まだ実際の托卵例を見つけるに至っていませんが、ここで試しにウグイスの初認記録の年変化と比較してみました（図2）。すると、意外にも比較的高い相関係数が得られたのです。この2種はこの20年間で、ともに徐々に渡来が早まってお

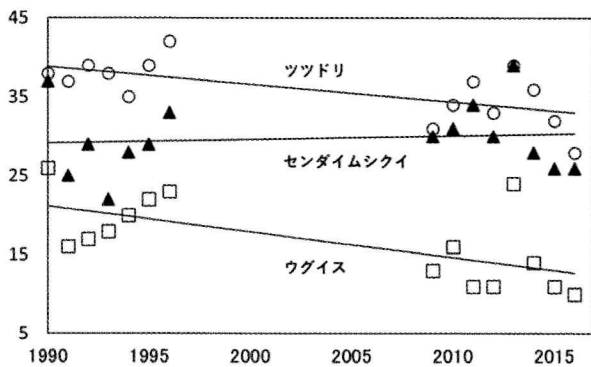


図2. ツツドリ、センダイムシクイおよびウグイスの初認日の年変化傾向（○ツツドリ、▲センダイムシクイ、□ウグイス）。縦軸の数値は、4月1日を1としたときの換算日。

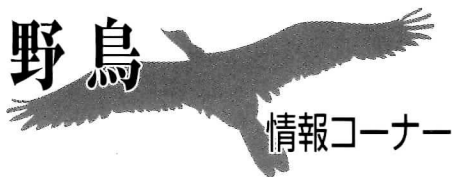
り、年による変動傾向も比較的類似していると思われます。単なる偶然かもしれませんが、なかなか興味深い結果と思われます。もしかすると、羊ヶ丘の森に来るツツドリも、托卵相手の本命として実はウグイスを狙っているのかも知れません。ただし、羊ヶ丘の森におけるツツドリの初認はほとんどオスの声によるものなので、実際に托卵に深く関わるメスの渡来日の傾向も同様なのかについては疑問が残るかもしれません。

同じ場所での夏鳥初認記録を長年積み重ねることは大変ですが、たとえば自宅近くで鳥を見ている人にとっては比較的簡単にできることかもしれません。そうして集めた長年の記録を眺め直し、いろいろ推測を重ねることで、夏鳥たちの気持ちに思いを巡らせてはいかがでしょうか。

引用文献

- 樋口孝城 1999. 北海道医療大学周辺における夏鳥の初認記録について.北海道医療大学基礎教育部論集25: A99-A102.
 川路則友 1997. 羊ヶ丘における夏鳥の初認記録について.ワイルドライフレポート 17: 2-8.
 川路則友 2015. だまし上手のツツドリ、だまされ上手のアオジ.北海道野鳥だより182: 6-7.
 川路則友 2016. 托卵鳥の生息する森林.北方林業 67: 20-23.
 川路則友 2018.札幌・羊ヶ丘での夏鳥初認日に見られる変化.北方林業 69: 90.
 Koike, S. & Higuchi, H. 2002. Long-term trends in the egg-laying date and clutch size of Red-cheeked Starlings *Sturnia philippensis*. Ibis 144: 150-152.
 森さやか 2013.赤い卵を産む北海道のツツドリ.北海道野鳥だより172: 8-10.

野鳥



情報コーナー

鶴川漁港でコケワタガモ

北広島町 先崎 理之

2018年1月1日、胆振管内むかわ町鶴川漁港でコケワタガモに遭遇する幸運に恵まれました。近年は石狩・小樽での記録がありますが道央の太平洋側での記録は珍しいと思われれますので報告いたします。

もう10年近く前より、時間のある年は元日の未明から鳥見に繰り出しています。昼過ぎにスズメかカラスでその年の“初鳥”を迎えるよりは、真っ暗なうちからコミミズクかトラフズクを探したほうが、その年の鳥見を頑張ろうと思



コケワタガモ 2018. 1. 1 胆振管内むかわ町
潜水後に浮かび上がったところ

えるからです。今年の元日も朝2時には家を出て、沼ノ端でコミミズク2、トラフズク1などを観察し、幸先の良い

い新年を迎えることができました。その後、早朝は沙流川沖のマガンのねぐら立ちを観察し、畑ではハクガン成鳥とカリガネ幼鳥を観察しました。このとき午前10時、すこし疲労がたまってきたので仮眠を挟み、ちょうど正午に鵜川漁港に到着しました。漁港のふ頭の西側に10羽ほどのカモ類が溜まっています。おもむろに双眼鏡で覗いてみると、シノリガモとホオジロガモに混じりコケワタガモが飛び込んできました。予期せぬ出会いに一気に眠気が吹き飛びます。

しばらく観察を続けると、このコケワタガモの大体の行動パターンがつかめてきました。シノリガモ2羽と一緒に行動し、ふ頭の2～3メートル横で潜水を繰り返して甲殻類か何かを食べています。そして、人や車が近づくとそっと離れて行き、いなくなるとまた戻ってきて潜水する、そんな感じです。ともあれ、じっくり観察できるまたとない機会なので、性別や年齢も探ってみます。全身が茶色なので

明らかに雄の成鳥ではありません。三列風切が全体的に褐色で短く、体の茶色も煤けていることから幼鳥で、側脇が少し白っぽく、喉や後頭部の瘤の部分が黒くなっていることから、雄であることがすぐにわかりました。以前観察した雄の幼鳥とは違い、この個体は肩羽の軸が白くないなど興味深い特徴も読み取れました。1時間ほど観察し、満足したところでその場を立ち去りました。

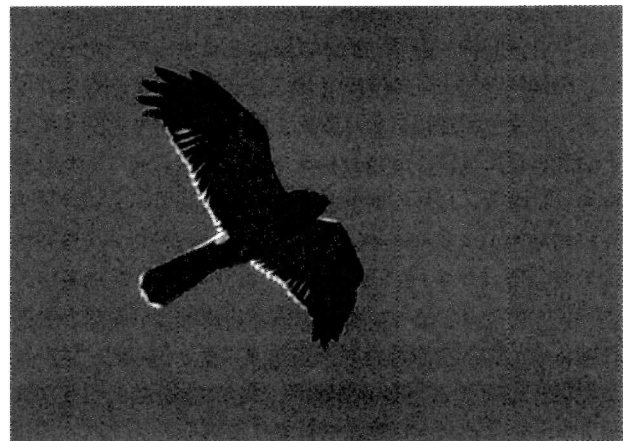
後に聞いた話では、この個体はその日はその後しばらく鵜川漁港に滞在していたそうです。しかし、数日後に行つたときは、カモ類が少なくコケワタガモも見当たりませんでした。鵜川漁港では海が荒れるとカモ類の群れが入ることがあるので、周辺の海上からたまたま避難してきていたのかもしれませんが。あるいは渡りの途中に立ち寄りただけだったのかもしれませんが。私はこの前後の情報は何も把握していませんが何かご存知の方はいらっしゃるでしょうか。

伏古公園(札幌市)上空に
マダラチュウヒ
札幌市南区 田中 かおり

2018年4月23日の札幌市東区伏古公園、きれいに晴れ渡った青空の下の午前中のことです。松の木の高い所で採餌していたイスカの群れが警戒音を上げながら飛び去りました。その少し後に上空をゆったり旋回する見慣れない鳥を発見。白い翼の先端はくっきりと黒く塗り分けられ翼指は5本、首から上、顔面も真っ黒です。カモメではないし猛禽類だとしても今まで私には見覚えのない姿でした。

「何か変わった鳥が飛んでいます」と居合わせた方々にお知らせして飛び去るまで観察を継続。おそらくチュウヒであろうことと確か図鑑に載っていたはずというところまでは思い至ったのですがその先は楽しい宿題となりました。

帰宅後、ネットや図鑑の画像からこの鳥はマダラチュウ



マダラチュウヒ 2018.4.23 札幌市東区

ヒかも知れないと考え始めましたが特徴的な美しいイカリ模様の背面写真が撮れておらず残念です。ふと見上げた先にまさか旅の途中のマダラチュウヒが飛んでいるなんてほんとうに幸運な出会いでした。

表紙の鳥

ツツドリ

春になるとポポ、ポポ、ポポとよく山の方から聴こえてきます。なんの声だろうかと不思議でした。調べてみるとツツドリだと分かりました。一度見たいと思って・・・声はすれども姿は見えずです。

ところがチャンス到来。近くの樹に止まったと思ったら、下に降りてきてエサ(ミミズ)を探し食べています。ついに念願のツツドリです。しかもすぐ近くで見ることができました。年々、森林がなくなり野鳥たちも生活しづらくなってきたと思います。いつまでもこの鳥たちの声を聴いていきたいですね。

漆崎 修(札幌市西区)



ロシア極東・鳥紀行 (2)

美幌市 藤 巻 裕 蔵

コウノトリ調査

コウノトリの分布域は、ロシア極東南部、中国東北地方、朝鮮半島である。かつては日本でも繁殖する留鳥であったが、1964年に福井県小浜市で2羽の雛が孵化したのを最後に繁殖する日本生まれの個体はおらず、当時は大陸から飛来するものが稀に見られるだけであった。将来日本でのコウノトリ復活のためその生態を明らかにするというのがこのときの調査目的の一つであった。

調査地はナベヅルとほぼ同じ沿海地方北部のビキン川とその支流であるアルチャン川との間にある湿原である(図1、本誌191号)。調査開始は5月27日で、ナベヅルのときより3週間ほど遅く、樹木は緑になり始めていた。

この湿原は南北・東西とも約15kmの広がりを持ち、7日間の探索で繁殖中の巣4か所、古巣1か所を確認することができた。巣は全て枯れたカラマツに造られていた。カラマツには太い横枝があり、巣造りに適しているのであろう。繁殖中の4巣のそれぞれの間隔はおよそ10~15kmであった。コウノトリの巣は大きく直径はおよそ1.5mで、ナベヅルの場合と違って開けた湿原の中の高い単木、または疎林中の高木にあるので、発見は容易であった。巣にはすでにかなり大きな幼鳥がおり、その数は3巣で3羽ずつ、1巣で4羽であった。

見つけた巣のうち、巣位置が低く観察しやすい1巣につき(写真5)、6月5日から巣から約40mに設置したブラインドから観察を始めた。また、この巣は約1.5km離れた調査基地からも見えるので、ブラインドで観察していない



写真5. コウノトリとその巣

ときには、望遠鏡で巣に親がいるかどうか観察できた。親が巣に戻るのは1日に最小で1回、最大で11回で、餌を持ってくるだけではなく、給餌を終えると巣近くに降り巣材をくわえて巣に戻ることが多かった。また親は巣上でよく嘴を打ち鳴らしながら、頭を背につくように振り上げ、それから足元まで振り下ろす

行動をした。

文献の幼鳥の成長の記録に基づくと、6月5日の観察開始時にこの巣の幼鳥は孵化15日目と推定された。親が巣に戻り餌を吐き出すと、幼鳥たちは一斉に勢いよくそれを食べた。一度30cmくらの魚を呑み込んだことがあったが、捕られたばかりの硬直した魚は嚙囊部分にとどまっていたため、その幼鳥はかなり長い間頭を上げ頸を伸ばしたままであった。

観察は6月29日まで25日続いたが、このときに幼鳥はほぼ成鳥と同じ大きさになっていた。観察を終え、調査基地を引き上げるとき、私たちを見送ってくれるかのように成鳥2羽が上昇気流に乗って青空高くで弧を描いてくれた。

オモロチカ(丸木舟)

コウノトリの調査を始める前に、この地域の自然を見る目的で、ヴェルフヌイ・ペレヴァルからビキン川の上流54kmにあるクラスヌイ・ヤルを訪れた(図1)。この二つの村の間には村落はなく、ずっと森林とマリー(湿原)であった。クラスヌイ・ヤルでは人口約600人、十数の民族が住んでいるとのことであるが、多いのはウデヘ族である。おもな産業は狩猟であるが、狩猟組合の猟師の話では、主要な獲物はクロテン、イタチ、ミンク、マスカラット、それに数は少ないがカワウソやジャコウジカ、またごくまれにオオヤマネコやクズリも捕獲するという。このほか、組合では、ゼンマイ、スグリやチョウセンゴシの実も収穫している。私たちが訪れたときも、ゼンマイを干しているのが所々で見られた。

この地方では、動物に関して詳しいのは猟師である。共同調査隊のロシアの研究者も猟師から研究に役立つ情報を得ているようである。私たちが短時間ではあったが、森林や河川の動物についてい

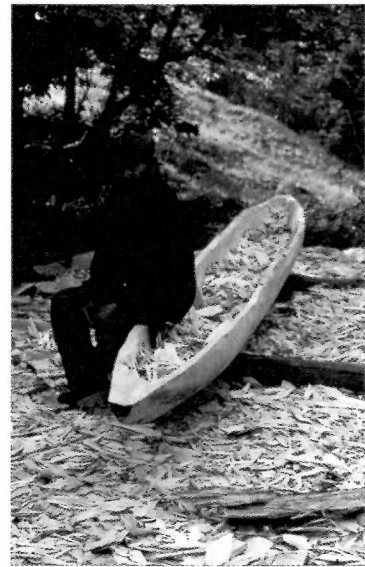


写真6. ウデヘ族の老人とオモロチカ

ろいろと話を聞くことができた。

村内を歩いていて、オモロチカを作っている所を見ることができた(写真6)。現在、川を行き来しているのは木の板で造った船であるが(写真3, 本誌191号)、かつてはこのオモロチカが川での交通手段であった。製作者のウデへの老人の話では、伝統ある舟の製造技術を若者に伝えるためだという。

川・森・鳥

ビギン川は中流部でも川幅は50~100m前後あり、大きく蛇行していて、所々に中洲があり、護岸の構造物のない自然の川である。かなりの急流である。1988年のナベヅル調査のとき、5月18日から19日にかけて17mmの雨が降ったが、一晩で川の水位が1.5mも高くなっていった。山の雪融けも関係あるとおもわれるが、激しい水位の変化である。川の蛇行部には、長さ5~7m、直径50~60cmの丸太数本をワイヤーロープで繋ぎ、その一方を岸に固定した「ボン」が設けられている。丸太で浮力があるため、水位が変わっても常に強い流れが岸に当たらないようになっていて、立派に護岸の役割をはたしている。

川岸はほとんど森林である。おもな樹種はナラ、ヤマナラシ、カンバ、シナ、ハルニレで、わずかにチョウセンゴヨウやトウヒが混ざる。また山の斜面はほぼ全体がナラ林である(写真7)。森林の景観は、ササがないことを除けば北海道と非常によく似ており、根室あたりの川沿いの森林の感じとそっくりである。樹種が北海道と同種の亜種か、近縁種なので、林相が同じように見えるのは当然かもしれない。中洲など冠水しやすい所で樹種はおもにヤナギ類であるが、所によっては高さ1mくらいに刈込まれている。冬の間雪から出ている部分がアカシカやノロに食べられるせいだという。



写真7. ビギン川沿いの森林と
ヴェルフヌィ・ペレヴァル村

鳥類では繁殖期に北海道ではお目にかかれない種が少ない。マダラチュウヒ、チュウジシギ、ヤツガシラ、ジョウビタキ、シマゴマ、カラアカハラ、カラフトムシクイ、シベリアセンニュウ、マミジロキビタキ、ミヤマホオ

ジロ、コウライウグイス、シベリアムクドリなどである。調査初日、マリーに行ったとき、ディスプレイをするホウロクシギに出会った。空中にいて、逆光でシルエットの状態だったので、おもわず「トキだ」と言ってしまった。なにか初めて見る鳥に出会えるのではという期待が大きかったのである。

しかし、調査期間中、センダイムシクイ、オオルリ、イカルといった普段北海道で見慣れている鳥と一緒に前述のような鳥が観察されることに、なんとなく違和感があった。

調査隊

ナベヅルとコウノトリの調査隊の構成は日本側からは私のほか、日本野鳥の会や山階鳥類研究所の研究者、映像記録担当者の計4~5人、ロシア側からはソ連科学アカデミー動物学研究所と地元の研究者、サポート役の森林官の計4人、総勢8~9人であった。調査地や調査基地の場所の選定、調査スケジュールの立案、移動手段の確保などは、この地域の事情に詳しい地元の研究者の役割である。

日本では調査に行くといっても、普通は年間に数日間の調査を何回か繰り返すことになるが、ロシアの野外調査はだいぶ違う。どの研究所も遠隔地に野外調査ステーションを持っている。ステーションは、宿泊・炊事用や採集した資料の分析用の部屋のある立派な建物で、夏の間1~2か月間ここを基地にして調査をすることになる。ステーションがない場合には、テント生活で、調査用具のほかに寝具、炊事用具、食料も一緒に運ばなければならない。ロシアの研究者は、このような長期の野外調査を「エクスペディチア(探検)」と言っている。ナベヅル調査では約20日間、コウノトリ調査では約30日間のテント生活で、まさにエクスペディチアであったと思う。

この後もハクチョウやエゾライチョウの調査で何回かロシアを訪れたが、ホテルに泊まるのは調査の最初と最後だけ、あとの宿泊はロシアの研究者の知り合いの民家、猟師小屋、テントでの生活であった。

調査中の生活

テント生活では、最初の数日間は体が休まるような気がしないが、それを過ぎると体の方が順応するのか、テントでの寝起きは苦にならなくなる。むしろ、素晴らしい自然に囲まれ、1日中鳥を見ることができ、実に快適な生活である。ただし雨のときは外に出ることができず、テントの中で過ごさなければならないので大変である。

毎朝、起きるとまず焚火をし、朝食の準備である。食事はカーシャ(粥、おもにソバが材料)、パン、ウハー(スープ、材料は野菜や川で釣った魚)、缶詰の肉類などである。全員がそろって食事をするのは朝と夕方(写真8)、昼食は各自調査の合間に自由に食べる。

ブラインドで観察するのは1~2人なので、それ以外の隊員は各自それぞれ自由に周辺の鳥を調べたり、捕獲し標



写真8. 調査基地での食事

識をつけたりするほか、薪集めをする。ロシア人は魚釣りが非常に好きようで、炊事や観察のとき以外はよく釣りをしていた。夕食後暗くなると、寝るまでの間は焚火を囲んでのおしゃべりとなる。

調査中の生活で、食事以外で重要なのは飲み水の問題である。使う水は、湿原の中の小さな流れの水、または川の水である。どちらの水も最初から紅茶のような色をしている。泥炭地の水に特有の色である。飲むには、必ず沸騰させなければならない。日本側の隊員が最初に覚えたロシア語は「ワダー、キピーラ（水が沸騰したか）」である。鍋やかんに入っている水を飲むとき、こう確かめる必要がある。飲み水で腹の調子がおかしくなるようなことはなかったが、使っているコップの内側がすぐに真っ茶色になってしまうほどであった。

タイガの贈り物

食料のうち、ソバ、パン、ジャガイモ、缶詰以外は現地調達である。なかでも重要なのは魚で、釣りや網で捕える。おもなものは、レノク（コクチマス）、カワカマス、ナマズ、ハリウス（カワヒメマス的一种）などで、レノクやカワカマスは大きなものでは体長50~60cmはある（写真9）。日本の川ではこれほどの大物が捕れることはないであろう。また捕れる数も多く、まるで生け簀からとってくるようである。

植物では、シラカンバのジュースがある。鉋で樹幹に傷をつけ、その下に鍋をつるしておくと、一晩で樹液が一杯になる。わずかに甘味があり、さっぱりした飲み物である。ロシア人はこれを「タイガの贈り物」と言っていた。もう一つはチョウセンゴミシの茎である。運んできた荷物の中にチョウセンゴミシの乾燥した茎があったので、何にするのかと思っていたが、キャンプではこれを薄く削って煎じ、お茶がわりに飲んだ。チョウセンゴミシのことを「レモンニク」と言っていたが、レモンの味がするためだとおもう。

調査基地周辺には、ワラビが沢山あった。ロシア人はワラビを食べないが、日本の商社がこの地域で地元の人々にワラビ採取をしてもらっていることから、食べる人が出て

きたようである。しかし、調理の仕方を知らないようで、形が崩れるくらいまで油でいためていたが、これはあまり美味しくなかった。

私のロシア語

ナベヅル調査のとき、ハバロフスク空港で出迎えてくれたロシアの研究者と初対面の挨拶のあと、まず質問したことは「英語が話せますか」であった。しかし、返ってきたのは「ネット」。困ったなと思ったが、いまさらどうしようもない。日本側の調査隊員で多少ともロシア語がわかるのは私だけである。やるしきゃないと覚悟を決めた。

これからの調査の打合せなど、もちろん全てロシア語。それまで私が学んできたロシア語は鳥類や哺乳類の論文を読むためのもので、簡単な挨拶以外の会話となるとさっぱり駄目である。論文に出てくる単語や表現は理解できたので、調査の打合せはなんとかあったが、キャンプ生活が始まると、聞きなれない単語ばかりで戸惑うばかりであった。例えば、料理、食べましょう、薪、焚火、焼く、沸騰する、テント、長靴、船外機など日常の生活で頻繁に使われる用語が最初はまったく理解できなかった。当初は分からない単語が出てくると、少し待ってもらい辞書を開くという具合であった。分かりにくい一つの理由は、アクセントのない「o」が「a」に発音されるためである。例えば、船外機は「motor」であるが、会話では「マトール」となる。また前置詞が次の名詞と一緒に発音されることもある。活字を見れば理解できるが、耳から入ってくると、まるで別の言葉である。

約1か月間の共同生活で少しはロシア語が上達すると思っていたが、聞き取りがややよくなった程度で、話す方は最初とほぼ同じであった。「ロシア語を何年くらい勉強したのか」という質問には、「20年ちょっと」と答えたが、信じてもらえなかったかもしれない。



写真9. ビギン川の魚と筆者

2017年度 北海道野鳥愛護会探鳥会記録(2017.4~2018.3)

科・種名	探鳥地	モエレ沼	宮島沼	野幌森林公園	藤の沢	野幌森林公園	千歳川	鶴川河口	野幌森林公園	植苗ウトナイ	野幌森林公園	福移	野幌森林公園	石狩川河口	鶴川河口	野幌森林公園	いしかり調整池	宮島沼	野幌森林公園	野幌森林公園	ウトナイ湖	野幌森林公園	小樽港	野幌森林公園	円山公園	ウトナイ湖	記録回数		
	月日	4/16	4/23	4/29	5/5	5/7	5/14	5/21	5/28	6/4	6/18	6/25	7/9	8/8	8/27	9/3	9/10	10/1	10/8	11/5	11/12	12/3	1/21	2/4	3/4	3/18			
カモ科																													
ヒシクイ		●																●			●					●	4		
マガン		●																●			●						●	4	
ハクガン		●																										1	
シジュウカラガン																		●										1	
コブハクチョウ																						●						2	
オオハクチョウ																						●						2	
オシドリ			●			●		●		●		●								●		●						6	
ヨシガモ	●																	●			●						●	4	
ヒドリガモ	●	●																●			●						●	5	
アメリカヒドリ	●																											1	
マガモ	●		●	●		●			●	●	●	●			●	●			●	●	●		●				●	15	
カルガモ	●	●		●		●	●				●				●			●										7	
ハシビロガモ	●	●					●											●										4	
オナガガモ	●	●																●			●						●	5	
シマアジ		●																										1	
コガモ	●	●	●				●											●	●	●								7	
ホシハジロ																		●										1	
キンクロハジロ	●	●	●			●												●	●	●	●							8	
スズガモ																		●	●		●							3	
シノリガモ																							●					1	
クロガモ							●																●					1	
ホオジロガモ																						●		●			●	3	
ミコアイサ	●																					●					●	3	
カワアイサ																						●					●	2	
ウミアイサ							●								●								●				●	3	
カイツブリ科																													
カイツブリ	●		●							●						●		●	●		●							7	
アカエリカイツブリ																							●					1	
カンムリカイツブリ																							●					2	
ミミカイツブリ																												1	
ハジロカイツブリ																			●		●		●					3	
ハト科																													
キジバト	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								17	
アオバト									●		●		●																3
アビ科																													
アビ							●																					1	
ウ科																													
ヒメウ																							●					1	
カワウ	●														●			●			●							4	
ウミウ							●							●	●								●				●	5	
サギ科																													
アオサギ	●	●	●		●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●				●	18	
ダイサギ															●		●	●			●						●	5	
チュウサギ																	●											1	
コサギ																	●											1	
クイナ科																													
バン	●																											1	
オオバン	●	●																				●						3	
カッコウ科																													
ツツドリ						●		●	●	●	●	●		●														5	
カッコウ							●		●	●	●																	4	
アマツバメ科																													
アマツバメ										●																		1	
チドリ科																													
コチドリ							●																					1	
シロチドリ															●													1	
シギ科																													
オオシギ					●				●																			2	
タシギ																		●										1	
オグロシギ							●																					1	

科・種名	探鳥地	モエレ沼	宮島沼	野幌森林公園	藤の沢	野幌森林公園	千歳川	鶴川河口	野幌森林公園	植苗ウトナイ	野幌森林公園	福移	野幌森林公園	石狩川河口	鶴川河口	野幌森林公園	いしかり調整池	宮島沼	野幌森林公園	野幌森林公園	ウトナイ湖	野幌森林公園	小樽港	野幌森林公園	円山公園	ウトナイ湖	記録回数
	月日	4/16	4/23	4/29	5/5	5/7	5/14	5/21	5/28	6/4	6/18	6/25	7/9	8/8	8/27	9/3	9/10	10/1	10/8	10/11	11/5	11/12	12/3	1/21	2/4	3/4	
オオソリハシシギ														●												1	
アカアシシギ								●																			1
タカブシギ																		●									1
ミュビシギ															●												1
トウネン								●						●	●		●										4
エリマキシギ														●													1
カモメ科																											
ウミネコ								●						●	●								●				4
カモメ	●																						●			●	3
ワシカモメ																							●				1
シロカモメ																							●				1
オオセグロカモメ								●				●		●	●								●			●	6
ウミスズメ科																											
ハシブトウミガラス																							●				1
ウミガラス																							●				1
ウミスズメ																							●				1
ウトウ																							●				1
ミサゴ科																											
ミサゴ								●						●													2
タカ科																											
トビ	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	21
オジロウシ		●												●	●		●					●	●		●	●	8
オオウシ																						●	●		●	●	3
チュウヒ									●									●				●	●			●	3
ハイタカ			●				●															●	●			●	5
オオタカ															●							●				●	1
ノスリ	●																					●					3
フクロウ科																											
フクロウ								●																			1
カワセミ科																											
カワセミ					●		●							●	●		●			●							6
キツツキ科																											
アリスイ										●																	1
コゲラ			●	●	●	●	●		●	●	●	●		●			●		●	●		●		●	●	14	
オオアカゲラ			●	●	●	●	●		●	●	●								●	●		●		●	●	8	
アカゲラ	●		●	●	●	●	●		●	●	●								●	●		●		●	●	13	
クマガゲラ					●															●	●				●		4
ヤマゲラ			●			●	●		●						●						●		●				7
モズ科																											
モズ	●																										2
ハヤブサ科																											
チゴハヤブサ															●												1
ハヤブサ														●	●			●					●				4
カラス科																											
カケス																						●	●	●		●	4
カササギ																							●				1
ハシボソガラス	●	●		●		●	●		●	●	●	●		●								●		●	●	●	12
ハシブトガラス	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	25
キクイタダキ科																											
キクイタダキ			●																			●	●		●	●	5
シジュウカラ科																											
ハシブトガラ		●	●	●	●	●		●					●							●	●	●	●	●	●	●	15
ヤマガラ			●	●	●	●		●					●							●	●	●	●	●	●	●	12
ヒガラ	●		●	●	●	●		●		●			●							●	●	●	●	●	●	●	13
シジュウカラ	●	●	●	●	●	●		●	●	●			●							●	●	●	●	●	●	●	19
ヒバリ科																											
ヒバリ	●	●						●				●		●				●	●								7
ツバメ科																											
ツバメ								●																			1
イワツバメ								●							●												2
ヒヨドリ科																											
ヒヨドリ	●	●	●	●	●	●		●	●	●		●		●					●	●	●	●	●	●	●	●	19
ウグイス科																											
ウグイス			●	●	●	●		●	●	●	●	●								●	●						11

科・種名	探鳥地	モエレ沼	宮島沼	野幌森林公園	藤の沢	野幌森林公園	千歳川	鶉川河口	野幌森林公園	植苗ウトナイ	野幌森林公園	福移	野幌森林公園	石狩川河口	鶉川河口	野幌森林公園	いしかり調整池	宮島沼	野幌森林公園	野幌森林公園	ウトナイ湖	野幌森林公園	小樽港	野幌森林公園	円山公園	ウトナイ湖	記録回数
		月	4	4	4	5	5	5	5	5	6	6	6	7	8	8	9	9	10	10	11	11	12	1	2	3	
日	16	23	29	5	7	14	21	28	4	18	25	9	20	27	3	10	1	8	5	12	3	21	4	4	18		
ヤブサメ			●	●	●	●		●	●	●		●														8	
エナガ科			●		●			●													●	●		●	●	7	
ムシクイ科																											
エゾムシクイ					●			●																		2	
センダイムシクイ			●	●	●	●	●	●	●	●		●														9	
メジロ科			●	●	●	●			●																	5	
メジロ			●	●	●	●			●																	5	
センニュウ科																											
エゾセンニュウ										●																1	
ヨシキリ科																											
オオヨシキリ										●																1	
コヨシキリ								●		●		●														3	
レンジャク科																											
ヒレンジャク			●																							1	
ゴジュウカラ科																											
ゴジュウカラ			●	●	●	●		●							●			●	●		●		●	●	●	11	
キバシリ科																											
キバシリ			●	●	●	●		●													●	●		●		8	
ミンサザイ科																											
ミンサザイ																					●					1	
ムクドリ科																											
ムクドリ	●	●										●							●				●			5	
コムクドリ												●														1	
ヒタキ科																											
トラツグミ																										1	
クロツグミ			●		●	●		●		●		●														6	
アカハラ										●																1	
ツグミ				●																	●	●	●	●		5	
コマドリ			●																			●				1	
コルリ										●																1	
ルリビタキ			●																		●					2	
ノビタキ	●	●						●		●		●		●	●		●				●				8		
コサメビタキ							●		●																	2	
キビタキ				●	●	●		●	●	●		●														7	
オオルリ				●	●	●		●	●	●		●														5	
スズメ科																											
ニューナイスズメ		●	●	●	●	●		●		●																7	
スズメ	●		●				●		●		●			●		●						●		●		9	
セキレイ科																											
キセキレイ				●		●																				2	
ハクセキレイ	●			●		●					●		●	●		●					●		●		●	10	
セグロセキレイ							●														●					2	
アトリ科																											
カワラヒワ	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●		●	●									14	
マヒワ			●	●																		●				4	
ベニマシコ										●																1	
ウソ																					●				●	2	
シメ				●																	●					2	
イカル						●		●	●																	3	
ホオジロ科																											
ホオジロ				●																						1	
ホオアカ								●			●		●													4	
アオジ		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●	●								14	
クロジ				●																						1	
オオジュリン	●	●					●				●								●							5	
ハト科 (外来種)																											
カワラバト (ドバト)	●																				●		●	●	●	5	
観察種類数	34	27	34	32	29	40	28	33	29	23	22	23	19	25	13	20	30	24	26	37	16	31	15	13	30		
参加者数	68	29	33	38	46	37	31	33	20	32	11	29	44	27	27	61	25	34	29	18	45	41	29	26	28		

※1 宿泊探鳥会を除き、25回実施（6月11日の厚別川は、荒天のため中止しました）
 ※2 総観察種 43科 139種、1回平均 26.1種（前年度：43科 146種、1回平均 26.9種）
 ※3 延参加者数 841人、1回平均 33.6人（前年度：916人、1回平均 36.6人）

2018年度(平成30年度) 総会報告

日 時：2018年4月11日(水) 18:00～20:00

日 時：かでの2・7 110会議室

樋口孝城会長の挨拶(代読)のあと、議長に栗林宏三氏を選出した。議案審議のうえ、原案どおり可決、承認された。

〔議事〕

1. 2017年度(平成29年度) 年度事業報告

〔総務〕

(1) 野鳥写真展の開催

期 間：2017年5月10日(水)～5月23日(火)

場 所：札幌市男女共同参画センター(北区北8西3)

エルプラザ2階 交流広場

出 展：16名 30点

(2) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展

期 間：2017年6月1日(木)～6月30日(金)

出 展：16名 30点

(3) 「北海道野鳥だより」の発送(188号～191号)

(4) 新年講演会・野鳥写真映写会の開催

日 時：2018年1月13日(土) 13:30～16:00

場 所：かでの2・7 520研修室

講 師：富川 徹氏

(北海道野鳥愛護会副会長)

演 題：「シマアオジの回復保全を願いながら」

参加者：82名(写真提供者5名)

(5) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売 80部 販売価格1,200円

(6) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)

(7) 傷害保険の更新(対象者916名 保険料18,320円)

〔広報〕

(1) 「北海道野鳥だより」188号～191号の発行

(野鳥だより編集委員会)

(2) 北海道野鳥愛護会ホームページの維持・運営

(ホームページ運営委員会)

(3) 探鳥会年間予定表を関係施設に配置

〔探鳥〕

(1) 探鳥会25回(総参加者数841人 1回平均33.6人)

(2) 宿泊探鳥会 2017年10月21日(土)～22日(日)

十勝(1泊2日) 参加者43名

(3) 石狩土地改良区との間で、「いしかり調整池の施設利用に関する確認書」の交換を行った。

(4) ヤング探鳥会を初めて計画し、3回実施した。

2. 2017年度決算報告

2017年度決算書(別掲のとおり)

3. 会計監査報告

吉中宏太郎監事から適正に処理されている旨の報告があった。

4. 2018年度(平成30年度) 事業計画

〔総務〕

(1) 野鳥写真展の開催

期 間：2018年5月10日(木)～5月23日(水)

場 所：札幌市男女共同参画センター(北区北8西3)

エルプラザ2階 交流広場

(2) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展

期 間：2018年6月1日(金)～6月30日(土)

(3) 「北海道野鳥だより」の発送(192号～195号)

(4) 新年講演会・野鳥写真映写会の開催

日 時：2019年1月12日(土)予定

(5) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売

(6) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)

(7) 傷害保険の更新

(8) 関連団体との協力(野幌森林公園を守る会など)

〔広報〕

(1) 「北海道野鳥だより」192号～195号の発行

(野鳥だより編集委員会)

(2) 北海道野鳥愛護会ホームページの維持・運営

(ホームページ運営委員会)

(3) デジタル・バードウォッチングの支援

(4) 探鳥会年間予定表を関係施設に配置

〔探鳥〕

(1) 探鳥会27回(宿泊探鳥会を含む)

(2) 宿泊探鳥会 2018年9月1日(土)～2日(日)

オホーツク方面(1泊2日) 定員45名

(3) いしかり調整池環境保全活動

【その他】

(1) 本会発足50周年記念事業の推進

(2) ヤング探鳥会の活動支援

5. 2018年度予算

2018年度予算書(別掲のとおり)

6. 2018年度役員人事

監事の川東保憲氏が退任し、後任として白澤昌彦氏を選任した。幹事の高橋良直氏、田中 陽氏、本間康裕氏が退任し、新任幹事として白田 正氏、國本昌秀氏、今堀魁人氏を選任した。

顧問 藤巻 裕蔵、小堀 煌治、戸津 高保
 会長 樋口 孝城
 副会長 富川 徹、栗林 宏三、横山加奈子
 監事 吉中宏太郎、白澤 昌彦
 代表幹事 畑 正輔
 幹事
 (総務) ◎辻 雅司、品川 睦生、竹内 強、
 松原 寛直、中村 隆、畑 正輔
 (会計) ◎横山加奈子、原 美保、浜野チエ子

(探鳥) ◎早坂 泰夫、梅木 賢俊、門村 徳男、
 北山 政人、後藤 義民、佐々木 裕、
 道場 優、鷺田 善幸、佐藤ひろみ、
 富川 徹、白田 正
 (広報) ◎島田 芳郎、川路 則友、樋口 孝城、
 道川富美子、島崎 康広、田中 冬彦、
 中田 達哉、國本 昌秀、今堀 魁人
 (◎印は、各担当の代表者)

2017年度 決算書

(収入の部)

項目	2016年度決算	2017年度予算	2017年度決算額	予算比(▲減)	備考
個人会費	586,000	512,000	505,000	▲7,000	前納、後納を含む
家族会費	180,000	156,000	159,000	3,000	
団体会費	5,000	5,000	5,000	0	
活動収入	240,600	210,000	221,470	11,470	講演会、小樽探鳥会、カレンダー売上他
雑収入	4,062	828	4	▲824	利息他
寄付金	11,000	10,000	73,000	63,000	個人寄付
小計	1,026,662	893,828	963,474	69,646	
繰越金	202,519	271,172	271,172	0	
合計	1,229,181	1,165,000	1,234,646	69,646	

(支出の部)

項目	2016年度決算	2017年度予算	2017年度決算額	予算比(▲減)	備考
印刷費	456,956	435,000	444,374	9,374	野鳥だより印刷費他
通信費	130,214	130,000	129,384	▲616	会報発送費、切手代、ホームページ維持費
会議費	48,700	50,000	48,700	▲1,300	幹事会、総会会場費
活動費	216,299	233,000	189,407	▲43,593	会場費、バス代、カレンダー支払
交通費	18,500	20,000	10,500	▲9,500	発送時交通費
消耗品費	28,380	40,000	30,503	▲9,497	ink代、封筒代、用紙代他
事務所費	40,000	40,000	40,000	0	事務所費用
傷害保険費	17,960	18,000	18,320	320	保険代
雑費	1,000	10,000	2,000	▲8,000	設備利用料他
予備費	0	189,000	0	▲189,000	
基金積立	0	0	0		
次年度繰越	271,172	0	321,458	321,458	
合計	1,229,181	1,165,000	1,234,646	321,458	

2018年度 予算書

(収入の部)

項目	2018年度予算	2017年度決算	増減	備考
個人会費	520,000	505,000	15,000	前納、後納を含む
家族会費	147,000	159,000	▲12,000	
団体会費	5,000	5,000	0	
活動収入	210,000	221,470	▲11,470	講演会、小樽探鳥会、カレンダー売上他
雑収入	542	4	538	利息他
寄付金	10,000	73,000	▲63,000	個人寄付
小計	892,542	963,474	▲70,932	
繰越金	321,458	271,172	50,286	
合計	1,214,000	1,234,646	▲20,646	

(支出の部)

項目	2018年度予算	2017年度決算	増減	備考
印刷費	435,000	444,374	▲9,374	野鳥だより印刷費他
通信費	180,000	129,384	50,616	会報発送費、切手代、ホームページ維持費
会議費	50,000	48,700	1,300	幹事会、総会会場費
活動費	200,000	189,407	10,593	会場費、バス代、カレンダー代支払他
交通費	0	10,500	▲10,500	発送時交通費
消耗品費	42,000	30,503	11,497	事務用品他
事務所費	40,000	40,000	0	
傷害保険費	17,000	18,320	▲1,320	保険代
雑費	10,000	2,000	8,000	設備利用料他
予備費	240,000	0	240,000	
基金積立	0	0	0	
次年度繰越金	0	321,458		
合計	1,214,000	1,234,646	▲20,646	

積立基金特別会計

(2017年度収入決算) (2018年度収入予算)

項目	金額	項目	金額
積立金	600,000	積立金	600,000
一般会計より繰入	0	一般会計より繰入	0
合計	600,000	合計	600,000

会員数

	2014. 4. 1	2015. 4. 1	2016. 4. 1	2017. 4. 1	2018. 4. 1
個人	257名	258名	262名	262名	274名
家族	99名(43家族)	111名(47家族)	125名(54家族)	124名(55家族)	119名(52家族)
団体	2会員	2会員	1会員	1会員	1会員
合計	358名	371名	388名	387名	394名



円山公園

2018. 3. 4
札幌市白石区
長野 隆行

3月になった途端に、数年に一度の爆弾低気圧による暴風雨に見舞われた北海道。その2日後に開催された円山公園探鳥会に参加しました。あいにくの小雨が降る中、傘を差しながらの観察でしたが、天気予報では最高気温が8℃と予想され、進む雪解けに春の気配が感じられた探鳥会でした。

当日は雨天のせいか、例年よりは野鳥の出現数が少ないとのことでしたが、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラなどのカラ類や、アカゲラ、コゲラ、そしてキクイタダキなどを観察することができました。中でもキクイタダキは、全長がおよそ10cmと小さな鳥ながら、その名のとおり頭のてっぺんの黄色の模様を、双眼鏡でしっかりと観察できました。

担当幹事の方々や参加した皆さんとアットホームな雰囲気の中で、楽しく時間を過ごすことができたことに感謝いたします。

余談ですが、私が最初に参加した探鳥会は、単身赴任中の釧路で行われた市立博物館主催の観察会でした。これがきっかけとなり趣味のカメラの被写体として、花や風景の他に野鳥が加わりました。その後札幌に戻り、木を彫り彩色して本物そっくりの野鳥を作りたいとの思いから、バードカービングを始めました。全ては十数年前の釧路での「探鳥会」から始まったと、今改めて思い出しています。

野鳥の観察、撮影、バードカービングを通じて、厳しい自然の中での野鳥の生態や、野鳥を取り巻く環境の変化をより身近に感じています。

この度、北海道野鳥愛護会に入会させていただきました。担当幹事の方々や会員の皆さんから、野鳥に関する様々なお話を伺いながら、野鳥への関心を深めていくことができたと思います。

今後とも、よろしくお願いいたします。

【記録された鳥】コゲラ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、スズメ、カワラバト (ドバト)

以上13種

【参加者】今村三枝子、岩井幸子、栗林宏三、笹森繁明、佐藤香織、品川陸生、白澤昌彦、鈴木勝之、高橋きよ子、立田節子、辻 雅司・方子、長野隆行、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、平岡信夫、辺見敦子、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、山田甚一、山本昌子、横山加奈子

以上26名

【担当幹事】原 美保、横山加奈子

ウトナイ湖

2018. 3. 18

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、カモメ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、オオワシ、ハイタカ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ハクセキレイ、マヒワ、ウソ、カワラバト (ドバト)

以上30種

【参加者】阿部 徹、石本史子、市川清美、今村三枝子、岩井幸子、白田 正、大表順子、後藤義民、近藤章子、佐々木道弘、佐藤香織、佐藤伸善、品川陸生、島崎康広、鈴木勝之、鈴木恵子、高橋貞夫、辻 雅司・方子、富川 徹、中島伸樹・蘭、畑 正輔、原 美保、原田茂治、樋口孝城、吉田慶子、鷺田善幸

以上28名

【担当幹事】辻 雅司、鷺田善幸

モエレ沼

2018. 4. 15

北海学園大学4年 高橋 瑞穂

私は大学の卒業研究をモエレ沼で行いたいと考えており、まずは野鳥を見に行くことにしました。その時ちょうど探鳥会があると聞いて参加させていただきました。しかし、本格的な野鳥観察は初めてでした。事前にどのような野鳥がいるか確認してはいましたが、実際に見ると区別がつかず(特にカモ類の雌は全くといっていいほど分かりませんでした)、次からはもっと見分けられるよう特徴を覚えていきたいと思っています。

モエレ沼では水鳥を中心に観察しました。この日は残念ながら雨が降っており人が少なめでした。晴れている時はもっと人がいるそうなので少々残念でした。観察しているとカモ達ができるような動きをするのか、人が近づくと少しだけ距離を置いたり、オジロワシがやってくると警戒し逃げるのもしました。このように動きや他の動物との関わりを見ることができなのが観察の醍醐味だと感じました。また他には水鳥ではありませんがイスカを見ました。嘴が大変特徴的で興味深いと感じました。また今年はあまり観察されていなかったと聞き、見つけた時にはとても盛り上がりました。鳥合わせでは計37種類の野鳥を確認しました。まずはこの野鳥たちを見分けられるようにしていきたいと思っています。今回初心者で分からないことが多かったのですが、他の方々に教えて頂きとても参考になりました。また他の探鳥会も気になっており都合が合うか分かりませんがまた行ってみたいと思っております。機会がありましたらよろしくお願いいたします。

【記録された鳥】オシドリ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、バン、オオバン、カモメ、クロハラアジサシ、トビ、オジロワシ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ムクドリ、ツグミ、スズメ、ハクセキレイ、アトリ、カワラヒワ、イスカ、オオジュリン

以上37種

【参加者】今村三枝子、岩井 茂、白田 正、北山政人、栗林宏三、小谷内久江、桜田 翔、品川睦生、島崎康広、高橋瑞穂、辻 雅司、中田勝義、成田京子、野間梨衣奈、畑 正輔、早坂泰夫、早矢仕有子、原 美保、樋口孝城・陽子、美頭佳範、俣田貞子、吉田慶子

以上23名

【担当幹事】北山政人、樋口孝城

宮 島 沼

2018. 4. 22

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、シジュウカラガン、コハクチョウ、オオハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、アオサギ、オオバン、トビ、アカゲラ、ハシボソガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、カワラヒワ、アオジ

以上25種

【参加者】青木武男・あけみ、今村三枝子、大坪和憲・ミヤ子、栗林宏三、近藤章子、佐々木道弘、佐藤武信・妙子、佐藤ひろみ、品川睦生、鈴木勝之、高島 均・明美、高橋良直、高山俊春・裕子、田中さちよ、辻 雅司・方子、長尾保秀・由美子、野村美千代、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、前田美紀枝、本杉政司・朋子、吉田慶子、脇本千尋・文子

以上34名

【担当幹事】栗林宏三、佐藤ひろみ

野幌森林公園

2018. 4. 29

日高管内浦河町 寺屋 圭一

およそ40年ぶりに北海道野鳥愛護会に再入会させて頂いた浦河町在住の寺屋です。最近、地元で鳥見を再開し楽しんでいます。今回、家内と野幌森林公園探鳥会に参加しました。これからも、どうぞよろしく願い致します。

参加のきっかけは大学生の頃、毎日のように通った野幌森林公園を訪れてみたくなったからです。いざ訪れようと思うも何処から入ってどうやって戻って来ようか？今はどんなルールで廻って来るのか……。そんな時にふと愛護

会のことを思い出し探鳥会に参加を考えました。

当日は晴天で気温も上昇するとの予報で絶好の探鳥日和。桜前線が例年より早く北海道に上陸していることもあり、春の空気を感じながら大沢口へ到着。早速、クロツグミの美しい声に出迎えられ時間を待つと、想像よりも多くの方が探鳥会に集合しました。

久々の森林公園、まずは木々の太さにビックリ。都会近くにありながら原生林の姿を残している公園の素晴らしさに改めて感動しました。ゴジュウカラ、ヤマゲラの声聴き、定番アオジの姿を皆で確認しながら、昼に大沢口へ戻る行程をスタートしました。

幹事さんのガイドでヒガラやメジロの声から姿を探しました。残念ながら双眼鏡で見つけることができずに大沢池に到着。美しい水に溢れる大きな池を懐かしく思い描いていましたが、水面が広がるのは僅かだけ。とても驚きました。そんな僅かな水面や土手にカイツブリやオシドリが見られ、カワセミを確認できた参加者もおられたようです。大沢園地では突然聞こえたコマドリの声に思わず「コマドリ・・・」と叫んでしまいました。こちらも一生懸命に姿を探しましたが見ることはできず、後ろ髪を引かれながら大沢口への帰路を目指しました。

大沢口での鳥合わせでは35種類が確認されました。自分たちでチェックできていない鳥も多く、会として歩くことで、より観察の精度を高めるられることを再認識しました。また、とても観察熱心な若い方を見て、無性に学生の頃の懐かしさが込み上げて来ました。今度は夫婦2人でのんびり歩いてみようかと思います。それともまた探鳥会でご一緒させていただくかも知れません。とても楽しい一日を過ごせたことに愛護会、参加者の皆さんに感謝します。ありがとうございました。

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、カイツブリ、キジバト、アオサギ、イソシギ、トビ、オオタカ、ノスリ、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、コガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、クロツグミ、コマドリ、ニュウナイスズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ウソ、アオジ

以上35種

【参加者】阿部 徹・美子、市川清美、今村三枝子、岩井茂、岩井幸子、大内康典、大表順子、荻野久美子、数田真弓、川村宣子、栗林宏三、小島俊幸、鎌田要子、齊藤由美子・佑朱、佐藤香織、三歩幸光、品川睦生、島崎康広、杉田秀雄、鈴木恵子、田中慶洋・ひろ子、田中さちよ、寺屋圭一・千世子、富川 徹、長野隆行、中村 隆、畑 正輔、原田幸恵、樋口孝城、菱谷紀久子、福島 文、福本清昭、辺見敦子、前田八郎、松原寛直・敏子、三井 茂、森田 勉・粹月、山本育子、横山加奈子、吉見孝夫・紫乃

以上47名

【担当幹事】栗林宏三、畑 正輔

宿泊探鳥会(初秋のオホーツク)のお知らせ

今年の宿泊探鳥会は、この時期、オホーツク海沿岸に点在する湖沼(コムケ湖、濤沸湖、能取湖など)に集まるシギ・チドリの仲間やカモの仲間等を観察します。オグロシギ、ソリハシギ、キアシシギ、チュウシャクシギなどが期待できそうです。運が良ければ、オバシギやホウロクシギなども見られそうです。また、原生花園では、渡りの時期を迎えた草原の鳥なども観察する予定です。

月 日 9月1日(土)～2日(日)

行程内容 1日目 札幌駅北口(7:30発)→濤沸湖畔・湿原水鳥センター→網走観光ホテル(泊)
2日目 網走観光ホテル→小清水原生花園→能取湖→コムケ湖→札幌駅北口(18:00頃帰着予定)

※ 観察する鳥の出方や気象状況により一部行程が変わる場合があります。

定 員 45名(最少催行人員 35名)
催行確定の場合は、詳細な案内を8月17日頃に送付します。35名に満たない場合は旅行を中止します。中止の場合は、8月9日までにお知らせし、旅行代金を返金致します。

参加費用 25,000円(バス代、宿泊代、食事は1日目の昼食から2日目の昼食まで)

宿 泊 網走観光ホテル ☎0152-48-2121
申込受付 7月7日(土)午前9時から電話受付致します。
担当:畑 正輔(宿泊探鳥会担当幹事)
☎011-894-0017

※ 午前中は電話が混み合い、お待ちいただく場合があります。

※ メール受付は7月7日(土)午前9時から行います。(アドレス:hata2002@lapis.plala.or.jp)

旅行代金 申込み後10日以内に旅行代金を下記口座にお振込みください。

北洋銀行札幌駅南口支店
口座名(株)エイチ・ピー・シー・ビジョン
口座番号(普通預金) 3790202

取消規定 ご都合により参加の取消をする場合は、下記の取消料を申し受けます。

取消申出: 8月10日(金)～8月24日(金)
旅行代金の20%
8月25日(土)～28日(火)
旅行代金の30%
8月29日(水)～31日(金)
旅行代金の50%、
旅行出発後
旅行代金全額(払戻金なし)



【野幌森林公園】

2018年7月8日(日)

9月16日(日)

集合:野幌森林公園大沢口 9:00
大沢園地で昼食し、解散は
13:00頃を予定。

【石狩川河口】2018年8月19日

集合:はまなすの丘公園ヴィジターセンター駐車場
9:30

【鶴川河口】2018年8月26日

集合:鶴川温泉「四季の館」駐車場 9:45

【いしかり調整池】2018年9月9日

集合:いしかり調整池駐車場 9:30
場所は愛護会ホームページ「探鳥地紹介」参照

☆昼食、観察用具、筆記具などをご持参ください。

☆探鳥会の問い合わせ先

北海道自然保護協会 ☎011-251-5465

10:00～16:00(土・日曜日、祝日を除く)

鳥民だより

◆平成30年度 野鳥写真展出展者・作品◆

五十嵐国勝・・・亜種シマエナガ、オオタカ

小堀 煌治・・・カイツブリ、カワアイサ

齋藤 佑朱・・・ノゴマ、バン

齋藤由美子・・・カッコウ

佐伯 武美・・・キジバト、ノビタキ

漆崎 修・・・ツツドリ、ルリビタキ

品川 睦生・・・ヤマセミ、亜種シマエナガ

高橋 良直・・・トウネン、ハクガン

田向 一彦・・・フクロウ2点

富川 徹・・・クマガラ2点

長野 隆行・・・キビタキ、ウン

中村 隆・・・ミンサザイ、フクロウ

早坂 泰夫・・・ノハラツグミ、ホシガラス

吉川 健一・・・オシドリ

以上14名 26点

【新しく会員になられた方々】

寺屋 圭一・千世子(日高管内浦河町)

吉川 健一(帯広市)

高島 均・明美(札幌市清田区)

守屋 信男・幸代(札幌市西区)

出光 昭吉(札幌市西区)

ほか1名(匿名希望)

【北海道野鳥愛護会】年会費 個人 2,000円、家族 3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>